文化　第84巻 第1・2号 ―春・夏― 別刷
令和2年10月31日発行

20世紀後半の外来語使用急増の一過程
――外来語「パターン」の増加過程を例に――

石　　暘　暘

20 世紀後半の外来語使用急増の一過程
──外来語「パターン」の増加過程を例に──

石　　暘　暘

1．はじめに

20 世紀後半の日本語においては、外来語が急増したことが知られている。とくに、抽象的な外来語の急増が顕著である。橋本和佳（2010）によると、1970 年代頃、話題を問わず様々な文章に出てくる抽象的な外来語は、「定番外来語」と評されるほど多く用いられるようになったという。これらの抽象的な外来語の急増はどのように起こるのか、本稿ではその増加過程の一端を明らかにしたい。使用が増加した外来語には様々なものがあると思われるが、その一つとして、今回は抽象的な外来語「パターン」を取り上げ、その増加過程を検討する。その上で、類似する変化が見られる例も挙げながら、20 世紀後半の抽象的な外来語の増加に、どのような変化の過程があったのかを探る。

2．先行研究

20 世紀後半の外来語の急増について、量的な側面において検討したものとしては、橋本和佳（2010）、金愛蘭（2011）がある。橋本和佳は、20 世紀の新聞社説や国会演説を対象とした通時的な調査を行い、図 1 のように、60 年代から 70 年代半ば頃までの外来語使用の急増について明らかにした。また、金愛蘭は 20 世紀後半の『毎日新聞』を 1950 年から 10 年間隔で調査し、各年の総語数を算出して、語種構成比（和語・漢語・外来語・混種語の比率）を求めた。その結果、外来語の総語数比率は、述べ語数では 1950 年の 2.1% から 1970 年の 3.9% へと 2 倍弱の増加、異なり語数でも 1950 年の 6.1% から 1970 年の 9.6% へと 1.5 倍の増加が見られたことから、20 世紀後半の外来語全体の急増を指摘している。また、各年の上位 2000 語の範囲における語種構成比についても検討し、上位（高頻度）語における外来語の構成比は、述べ語数では

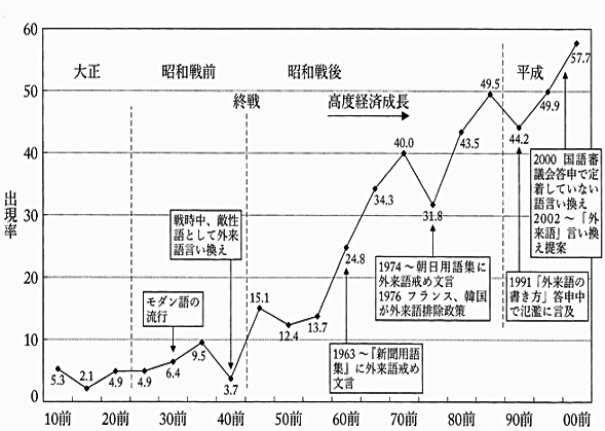


図 1　普通名詞の増加と社会背景（橋本 2011:90）

1950 年の 0.9% から 1970 年の 1.7% へと 2 倍弱の増加、異なり語数でも 1950 年の 2.0% から 1970 年の 3.7% へと 2 倍弱の増加が見られ、外来語が基本語の中に進出し、高頻度で使われるようになったことも示した。

さらに、質的な側面において、どのような意味分野の外来語が増加しているのかを検討したものとしては、佐竹秀雄（2002）が挙げられる。佐竹秀雄は、1990 年代の新聞家庭面の語種比率を調査し、1957 年の国立国語研究所による雑誌九十種調査の結果との比較から、20 世紀後半に外来語の急増が見られることを示した。その上で、二つの時期に見られる使用率上位の外来語について、意味分野の詳細を分析し、抽象的な外来語がより多く現われるようになることを明らかにした。また、橋本（2010）も、1970 年頃に見られる使用率上位の外来語には、話題を問わず様々な文章に出てくる抽象的な外来語があることを示した。これらの抽象的な外来語は「定番外来語」と評されるほど多くみられるようになり、それらの語の頻繁な使用が外来語全体の使用増加の一因となったと指摘した。金（2011）でも、20 世紀後半に増加した外来語には、抽象的な外来語が具体的な外来語より多く見られる傾向があるとされている。すなわち、20 世紀後半に起こった外来語使用の急増の一因には、抽象的な外来語の増加があると考えられる。

しかし、これらの抽象的な外来語の増加過程について、具体的な様相はまだ明らかになっていない部分が多い。日本語に借用され始めた初期から、現代に

おいて「定番外来語」と評されるほど多く用いられるようになるまで、どのような増加過程があったのかという点については、検討する余地が残っている。そこで本稿では、抽象的な外来語の具体例として、まず「パターン」を取り上げ、原語との関係も含め、使用増加の過程を検討する。そして、類似する変化の見られる語を同時に取り上げ、20 世紀後半の抽象的な外来語使用の増加において、どのような過程の変化が起こったのかを探る。

日本語資料については、まず文学作品を見る。文学作品には、外来語の使用がより早い段階で見られる。そして、文学作品には、筆者なりの特殊な言葉遣いがあるが、基本的に大衆向けのものとも言えるため、ある程度社会全体の言葉遣いを把握できるものと思われる。具体的には、明治から昭和初期の文学作品が多く収録されている「全文検索システム『ひまわり』の『青空文庫』パッケージ 20190401」『日本語歴史コーパス』、近現代文学が収録されている『CD-ROM 版：新潮文庫の 100 冊』を見る。また、新聞資料を見る。新聞には、毎日様々な種類の文章が掲載されているものであり、通時的な量には保証がある。そして、長期時間にわたって、マスメディアの中心的媒体として大衆に情報や知識などを伝える役割を果たしてきたため、言葉遣いは一般大衆向けに設定されている。したがって、新聞に掲載された言葉は、すでに一般社会に認められ、日本語内に定着したものであると思われる。そのため、新聞を調査対象にすることで、ある言葉が一般大衆にどの程度認識されているかというレベルを把握できると考えられる。具体的には、「ヨミダス歴史館」（明治－ 1980）[1]、『読売新聞縮刷版』[2]、『CD：毎日新聞データ集』（1995、2005、2010）を対象とする。英語資料については、1810 年からのデータが収録される「COHA」（*Corpus of Historical American English*、アメリカ英語歴史コーパス）と 1980 年代以降の英語資料で構成される「BNC」（*British National Corpus*、現代イギリス英語国立コーパス）を対象とする。『読売新聞縮刷版』、「COHA」、「BNC」はサンプリング調査、他の資料は全数調査である。

3. 日本語における「パターン」の使用変遷

3.1　第Ⅰ期－具象的意味の登場（1930 年代初―1960 年代末）

日本語における「パターン」は、1930 年代から見られる。

(1)［広告］パタン入りクロース／松屋　（「読売新聞」1934.7.5）

(2)［広告］婦人子供帽子のパターンブック　（「読売新聞」1946.8.2）

(1) は、右図のような「型紙附實用製！」という宣伝言葉が書かれた広告である。この「パタン」は、服を作る際に布を裁つために用いる、形に合わせて製図し切り取った紙、すなわち型紙を指す。(2) の「パターンブック」は、帽子を作るための型紙の実用書を指す。この「パターン」は「帽子の裁断用の型紙」という意味だと考えられる。本稿では、(1)(2) の「型紙」を「パターン」の意味①とする。また、この時期における意味①は、洋服・洋品の裁縫という洋裁の分野にしか見られない。

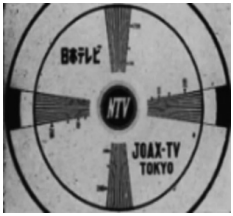
その次に見られるものは、1950 年代以降の例である。

(3) テスト・パターンはテレビ放送のはじまる前とか番組と番組の間、終ったあとなどに写しだされる。NTV のテスト・パターンに例をとればスクリーンの外がわに円型の二本の黒い線が写しだされる。

（「読売新聞」1953.8.31）

(4) 例えば、北欧やグリーンランド、それにシベリアなどの永久凍土地帯には地紋（グラウンド・パターン）と呼ばれているふしぎな現象がある。

（中谷宇吉郎『白い月の世界』1957　青空文庫）



(3) の「テスト・パターン」は、右図のように、テレビ放送の休止時間帯に流れる電波試験用の映像である。この「パターン」は、同心円を中心に、上下左右に放射状の線が出ている図案を指す。(4) の「グラウンド・パターン」は、シベリアなどの永久凍土地帯の地紋のことを指し、「パターン」は「土の紋」と解釈できるため、「図案」という意味だと考えられる。本稿では、(3)(4) の「図案」を意味②とする。また、この時期における意味②の使用は、(4) 以外はすべて (3) と同様に「テスト・パターン」の形で見られるため、意味②の「パターン」はテレビ放送の専門用語だと考えられる[3]。

この時期における各意味の使用を表1に示す[4]。表中の数値はデータベース「ヨミダス歴史館」による調査の用例数、[ ] 内の数値は『読売新聞縮刷版』によるサンプリング調査の用例数である[5]。

以上のように、1930年代初から1960年代末にかけては、「パターン」が①「型紙」、②「図案」という具象概念を表す意味として見られるようになる[6]。また、意味①は洋裁、意味②はテレビ放送の分野に限られている。本稿では、この時期を日本語「パターン」の第Ⅰ期とする。

表1　1930年代－1960年代末における「パターン」の使用

年	①	②
1934	1	
1946	2	
1947	4	
1953		1
1958		1
1960		[7]
1961	2	
1962	1	
1963	4	
1964	1	1
1965		
1966	1	1
1967	1	

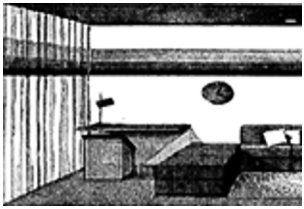
3.2　第Ⅱ期－抽象的な意味の急増（1970年代）

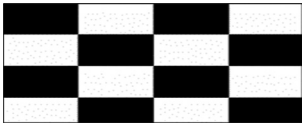
3.2.1　抽象的な意味の登場

1970年代以降、以下のようなものがみられるようになる。

(5) このパターンはカーテンにも及んで、いっそうトータルなイメージをつくる。四角や直線のかたさと、あざやかな色彩やカーペットのソフトな質感が対比的な効果をあげる。（「読売新聞」1970.10.9）

(6) 遺跡切りとる市松パターン（連載）（「読売新聞」1976.8.29）





(5)の「パターン」は、インテリアの壁の図案（右上の図の左部分のように、直線を繰り返す壁の図案）を指し、(6)の「市松パターン」は、歌舞伎役者の初代佐野川市松が着用した袴の図案（右下の図のように、二色の四角形の図案が繰り返された図案）を指す。(5)(6)の「パターン」は前期の意味②「図案」とも考えられるが、同じ模様を繰り返すという特徴が備わるため、本稿では(5)(6)の「パターン」の「同じ模様を繰り返す図案」を意味②′とする。また、この時期における意味②′は、(5)(6)のように、インテリアや服装に関わる文脈でよく見られる。

さて、この時期に特に目を引くのは、次に挙げられるような、抽象的な概念を表す新しい意味の使用が急増することである。

(7) 収益のパターンは変わるか。当社の調査部の予想では、一・四％の増益と、昨年末に行った予想よりやや増益率は小さくなっている。

（「読売新聞」1970.5.9）

(8) 鬼頭氏にまつわって、当面問題になっているのは、謀略電話事件と、共産党査問事件の資料収集の二点。この二つについて、同氏の否定の仕方をみると、全く同じとしか思えない一定のパターンがあるのに気づく。

（「読売新聞」1976.11.9）

(7) の「収益のパターン」は、ある決まりに従って繰り返されている、会社収益の増加の型を指す。この「パターン」は、「一定の決まりを持った繰り返しの型」という意味だと考えられる。(8) は、鬼頭氏の否定の仕方は同じ型の繰り返しであることを指し、この「パターン」も「一定の決まりを持った繰り返しの型」の意味である。本稿では、この抽象概念を表す「一定の決まりを持った繰り返しの型」を意味③とする。

この時期における各意味の使用を表2に示す。1970年代に入ると、「パターン」が急増する。それは、抽象的な意味③「一定の決まりを持った繰り返しの型」が圧倒的に多く見られるようになり、主な意味として用いられたためである。

表2　1970年代における「パターン」の使用状況

年	新聞記事				文学
	①	②	②′	③	③
1970	［2］	［1］	［2］	5［7］	2
1971	1			3	
1972				4	
1973				2	
1974				5	
1975				8	
1976		1	2	6	
1977				7	
1978				11	
1979				3	

3.2.2　各意味の使用分野

この時期における意味①②の使用には、次のようなものが見られる。

(9) 木綿屋さんで選んだ布を使って一つのパターンから三タイプのドレス。

（「読売新聞」1980.6.9）

(10) さりげなく映っていると思われがちな早朝テレビのテスト・パターン。

（「読売新聞」1976.8.2）

(9) の「パターン」は、意味①「型紙」である。この時期における意味①は、前期と同様に、洋裁の専門用語として使われ続けている。(10) の「テスト・パターン」は、電波試験の図案を指す意味②「図案」の用例であり、前期と同様に、テレビ放送の専門用語として用いられている。また、この時期に見られるようになる意味②′は、インテリアや服装に関わる文脈でよく見られる。

さて、急増する抽象的な意味③「一定の決まりをもった繰り返しの型」はどのような分野で用いられているだろうか。それを把握するために、「外交パターン」のような「パターン」を後項にもつ複合語を取り上げ、その前項要素を表3に示す。表3から、意味③の「パターン」の前項要素には、政治関係の「選挙」、経済関係の「株価変動」、スポーツ関係の「撃ち」などの専門性の高いものの他に、「生活」「食事」などの一般生活関係のものも見られることがわかる。すなわち、この時期に多く見られる抽象的な意味③は、特定の分野に限られず、広範囲で用いられている[7]。

表3　複合語である意味③の「パターン」の前項要素

選挙	9	負け	2	歌	1	防衛	1
撃ち	9	ビジネス	2	内戦	1	論議	1
株価変動	7	料理	2	均衡	1	実現志向	1
外交	7	食事	2	処理	1	保守・革新	1
生活	6	犯罪	2	警察殉職	1	ヒット曲	1
移民	4	喜劇	2	医療	1	恋	1

以上のように、1970年代においては、①「型紙」、②「図案」が前期と同様に専門用語として用いられ続けているほかに、②′「同じ模様を繰り返す図案」がインテリア、服装の分野に見られるようになる。さらに、抽象的な意味③「一定の決まりを持った繰り返しの型」の登場によって、1970年代に「パターン」の急増が見られ、一般化した。本稿では、この時期を日本語「パターン」変遷の第Ⅱ期とする。

3.3　第Ⅲ期－助数詞用法の現れ（1980 年代）

1980 年前後には、次のようなものが見られるようになる。

(11) 自信がないから、うまい人のマネしてれば安心なのかなあ…。そう、規律正しさとワン・パターン、何か関係あるかもしれませんね。

（「読売新聞」1979.3.19）

(12) 福田元首相は八月末に箱根のホテルで短い休暇。昨夏、田中元首相らとのゴルフ外交に励んだ河本経企長官は、箱根で今年もゴルフ―概して野党党首は仕事兼用の休暇、自民党実力者はワンパターン。

（「読売新聞」1981.7.19）

(13) あそこで終身雇用を前提にした基幹社員の「長期蓄積能力活用型」、契約制による専門職の「高度専門能力活用型」とパートや派遣などの「雇用柔軟型」という 3 パターンに分けたのは単に企業の都合からだけではないんです。（「毎日新聞」1995）

(14) 大野長官は、日本に向け発射された弾道ミサイルを撃ち落とすケースとして 3 パターンを想定していることを明らかにした。

（「毎日新聞」2005）

(11)(12) の「ワンパターン」は、1980 年前後に見られるようになるもので、一つの型を指しているため第Ⅱ期の意味③「一定の決まりを持った繰り返しの型」と考えられるが、「数詞＋パターン」という新しい用法であるため、ここでは意味③と分けることにする。1990 年代以降、(13)(14) の「3 パターン」のような、「ワン」のみではなく、「3」のような一般数詞表記が見られるようになる。田中佑（2016）は、「パターン」のこの数詞とが結合して数量詞をなす用法を、組み合わせを示す「助数詞用法」と名付けている。本稿では田中（2016）の定義に沿って、(11) ～ (14) の用法を④「助数詞用法」とする。

この時期における各意味の使用を表 4 に示す[8]。表 4 より、「パターン」は前

表 4　1980 年代以降における「パターン」の使用状況

年代	①	②	②′	③	④	
						ワンパターン
1980	3	2	3	61	9	9
1990	3	3	5	401	123	29
2000	1	1	1	293	31	3
2010	1	2	2	190	35	5

期と同じく、意味③が主な意味として使われ続けていることがわかる。また、①「型紙」、②「図案」、②′「同じ模様を繰り返す図案」は、前期と同様に、専門用語としてわずかに見られるのみである。

また、この時期に見られるようになる新しい用法④「助数詞用法」は、まず流行語「ワンパターン」として現れる。1980年版の『現代用語の基礎知識』では、「ワンパターン」が流行語として掲載されている。この「ワンパターン」の流行が可能になるのは、一般的に用いられていた意味③「一定の決まりを持った繰り返しの型」が日本語中にすでに定着していたことによると思われる。そして、流行語「ワンパターン」の「ワン」が「2、3、4…」に置き換えられ、用法④「助数詞用法」が生じたと考えられる。

以上のように、1980年代以降、④「助数詞用法」が見られるようになる。また、「パターン」は前期と同じく、抽象的な意味③「一定の決まりを持った繰り返しの型」が主な意味として多く使われている。本稿では、この時期を日本語「パターン」の第Ⅲ期とする。

4. 英語 pattern の意味

それでは、上述の日本語の「パターン」の変化は、原語とどのようなかかわりがあるのだろうか。「COHA」、「BNC」で見られる英語「pattern」の用法は次のようなものである。

(15)Wouldn't she have ordered a dress <u>pattern</u> if you had not told her the calico would not wash? (*Paul Prescotts Charge* 1865)

(16)In vain did the imagination attempt to trace the <u>pattern</u> of the flowers and scrolls which were woven in gold on the rich satin of the divans. (*El Fureidis* 1860)

(17)The constitutions of the colleges follow one general <u>pattern</u>, but most colleges have some peculiarities of their own. (*North Am Rev* 1861)

(18)and yet none read the service louder, or defended his favorite liturgy more zealously than himself. In some things he was a <u>pattern</u> man. (*Cousin Maud and Rosamond* 1860)

(15) は「もしあなたが、キャラコ（布）を洗わないことを彼女に伝えなかったのなら、彼女はドレスづくり用の型紙を注文しただろうか」という意味である。この「pattern」は布などにあてて裁断するための「型紙」を指す。(16) は

「ディヴァンの豊かなサテンに金で織られた花あるいは渦巻きの図案を模写する想像力の試みは無駄に終わった」という意味である。この「pattern」は「図案」の意味であり、花あるいは渦巻きの模様を繰り返す図案を指す。(17) は「大学の規則は、一定の決まりを持った繰り返し方式に従うが、ほとんどの大学では独自の特徴がある。」という意味である。この「pattern」は大学の構成様式を指し、「一定の決まりを持った繰り返しの型」という意味である。(18) は「それでも、彼よりも大声で礼拝を読み上げたり、お気に入りの典礼を熱心に擁護したりする人はいなかった。ある意味で彼は模範者だった」という意味である。この「pattern」は「模範」を指す。本稿では、(15) ～ (18) の意味を、それぞれ「pattern」の意味 A、B、C、D とする。

また、これらの意味が各年代でどのように用いられているのかを把握するために、1930 年代、1960 年代、1990 年代（それぞれ日本語「パターン」の変化時期Ⅰ～Ⅲに対応）において、各 200 例をサンプリングしてみてみると、表 5 のようになる。ここから、英語 pattern にはどの年代でも、具体的な概念を表す A「型紙」、B「図案」、および抽象的な概念を表す C「一定の決まりを持った繰り返しの型」、D「模範」という四つの意味が見られることがわかる。意味 C が若干割合を増したようにも思われるが、意味 A、B、D にはほぼ量的な変化がなく、全体的にいえば、英語 pattern には日本語「パターン」のような大きな変化（意味の更新、量の急増）が見られない。したがって日本語「パターン」の変化は、原語の変化によって起こったものではないと考えられる。

表 5　英語 pattern の各意味の使用数（サンプリング）

意味 / 年代	A 型紙	B 図案	C 一定の決まりを持った繰り返しの型	D 模範
1930	21	55	88	36
1960	17	23	133	27
1990	14	44	119	23

5. 20 世紀後半の外来語使用急増の一過程

5.1 「パターン」の使用増加過程

さて、英語「pattern」の意味との関係をふくめて、日本語「パターン」の増加過程を考えてみる。

まず、第Ⅰ期に洋裁の分野に限って見られる意味①「型紙」、テレビ放送の

分野に限って見られる意味②「図案」は、英語の意味 A「型紙」、B「図案」から、限られた専門分野において借用されたものだと思われる。なお、日本語の意味②「図案」は、「テスト・パターン」にしか見られない「テレビに流れる試験電波用の映像」を指すが、英語の意味 B「図案」は、英語辞典の (19)(20) の下線部からわかるように、特に「ある模様を繰り返す図案」に偏っているように見える。すなわち、日本語の意味②「図案」は、英語の意味 B の一部が限られた形で狭く借用されたものだと思われる。

(19)A decorative or artistic design, often repeated, esp.

（*Oxford English Dictionary*）

(20)A pattern is an arrangement of line or shapes, especially one in which the same shape is repeated at regular intervals over a surface.

（*Collins COBUILD English dictionary for advanced learners*）

また、第Ⅲ期に見られる④「助数詞用法」は、英語「pattern」には見られない。英語という言語には助数詞の用法がなく、「パターン」の意味④「助数詞用法」は日本語化の結果だと思われる[9]。

次に、「パターン」の急増の原因となる、第Ⅱ期から多く見られる抽象的な意味③「一定の決まりを持った繰り返しの型」は、英語の意味 C と同じように見える。しかし、英語から借用されたものであるのか、それとも日本語の前期の意味①②から自ら生じたものであるのかについては、さらに検討する必要がある。

第Ⅱ期における「パターン」の意味③「一定の決まりを持った繰り返しの型」には、〈繰り返し〉という特徴が備わっていると考えられるが、第Ⅰ期における意味①「型紙」、「テスト・パターン」で一つの映像を指す意味②「図案」には、〈繰り返し〉という要素が見られない。すなわち、第Ⅱ期の意味③と前期の意味①②の間には、明確な意味の関連性が見られず、そこに、意味の断絶があるといえる。それまで存在しなかった〈繰り返し〉という要素が突然発生し、意味③が生じたとは考えにくいだろう。また、第Ⅱ期の意味③は「政治」「経済」「スポーツ」等の分野をはじめ、一般的な分野に用いられているものであるが、第Ⅰ期の意味①②は、それぞれ「洋裁」「テレビ放送」の分野に限られ、専門用語のまま現代まで用いられ続けている。すなわち、第Ⅱ期の意味③と第Ⅰ期の意味①②の使用分野は比較的離れている。そこには、使用分野の断絶があるといえる。このような分野間の断絶を超え、「洋裁」「テレビ放送」

から突然「政治」「経済」「スポーツ」等の分野に広がり、かつ急増する、という変化が日本語内で自然に発生する可能性は低いと考えられる。

以上のように、「パターン」の第Ⅱ期に急増する抽象的な意味③は、1）意味の断絶、2）分野の断絶、という二つの理由で、第Ⅰ期の意味①②から自然に生まれたものとは考えにくい。それよりも、英語からそのまま借用されたものだという考え方のほうが妥当であろう。1970 年代に見られる意味②′には触れてこなかったが、英語の意味 B からの借用の可能性も高いと思われる。

このように、借用初期に「パターン」は、具象意味①「型紙」、意味②「図案」として英語 pattern から借用され、①は洋裁、②はテレビ放送の分野に限って用いられる。1970 年代以降、抽象意味③「一定の決まりを持った繰り返しの型」が英語 pattern からあらためて借用されて急増したため、「パターン」は経済、政治の分野等、幅広く一般的に用いられるようになった。すなわち、20 世紀後半に見られる「パターン」の急増は、抽象意味③が登場したために起こったものである。

5.2　抽象的な外来語の再借用

このような、「パターン」の増加過程と同様の変化は、「ポイント」「イメージ」にも見られる。石暘暘（2018）（2020）は、「ポイント」「イメージ」の意味変遷を記述し、2 語にも急増の時期があったことを示した。それらをもとに、「パターン」「ポイント」「イメージ」の増加過程を、図 2、3、4 に示す。

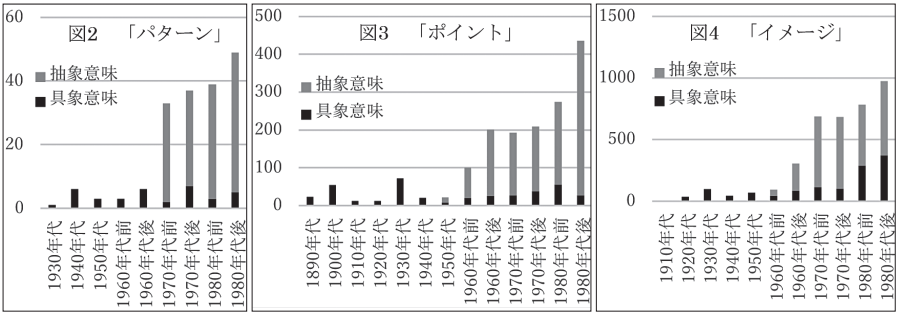


図 2、3、4 から、「パターン」と同じく、「ポイント」「イメージ」の急増も、抽象的な意味が登場した結果であることがわかる。また、3 語の急増がともに 1960・70 年代に集中していることもわかる。

「ポイント」「イメージ」の増加過程の詳細は、次のようにまとめられる。

まず、日本語における「ポイント」は、次の三つの用法を経て増加してきた。

(21) ポイントに置き石、上野発の終列車が脱線した。

（「読売新聞」1890.9.16）

(22) ポイント式活字（九ポイント）発売広告　（「読売新聞」1905.1.6）

(23) この初勝利に投手起用がポイントだ。　（「読売新聞」1962.5.19）

19 世紀末・20 世紀初の「ポイント」は、(21)(22) の用法として借用された。(21) の「ポイント」は鉄道軌道を切り替える装置を指しており、「転轍機」という具象的な意味である。(22) の「ポイント」は「活字の大きさの単位」という具象的な意味である。また、(21) は鉄道、(22) は印刷の分野に限られる。その後、1960 年代に、(23) の用法が登場し、しかも急増する。(23) の「ポイント」は、試合勝利のための重要な部分を指しており、「要点」という抽象的な意味である。また、この「要点」という意味は、スポーツ、外交の分野等、特定の分野に限られず、幅広く一般的に用いられている。すなわち、抽象的な意味「要点」の登場によって、「ポイント」の使用急増が起こり、一般化したといえる。

また、日本語における「イメージ」は、次の二つの用法を経て増加してきた。

(24) 自分の新らしく移った住居については何の影像（イメジ）も浮かべ得なかった。　（夏目漱石「道草」1915　青空文庫[10]）

(25) 日本の驚異的な経済成長は、もはや常識になったといってよく、ソ連大衆の目には "トランジスターとナイロンと電子顕微鏡を誇る先進工業国 " というイメージが焼きついてしまった。

（「読売新聞」1965.08.14　国際面）

1910 年代の「イメージ」は、(24) のような用法として英語から借用された。(24) の「イメージ」は意識に浮かんだ住居の映像を指しており、「意識に浮かんだ、物事の具体的な映像」という意味である。また、借用初期において、この意味は「文学作品」「新聞の文化面」にしか見られない。1960 年代以降、(25) の用法が登場し、しかも急増する。(25) の「イメージ」は先進工業国という日本の典型像を指しており、「心の中に抱く、物事の典型像」という抽象的な意味である。また、この意味は、政治、経済の分野等、特定の分野に限られず、幅広く一般的に用いられる。すなわち、抽象的な意味「心の中に抱く、物事の典型像」の登場によって、「イメージ」の使用急増が起こり、一般化したといえる。

このように、「パターン」「ポイント」「イメージ」の3語は、いずれも借用初期の具象的意味（「型紙、図案」「転轍機、活字の大きさの単位」「物事の具体的な映像」）が、比較的離れた抽象的意味（「一定の決まりを持った繰り返しの型」「要点」「物事の典型像」）に変化している。初期と急増期にそれぞれ登場する意味間に、明確な関連性が見られないため、ここには「意味の断絶」があると考える。また、使用分野も借用初期の専門用語（「洋裁・テレビ放送」、「鉄道・印刷」、「文学・文化」）から、比較的離れている経済・政治等の分野に変化し、特定の分野に限られず、広範囲で急激に一般的に用いられるようになる。それらの使用分野は比較的離れており、その間に越えがたい距離がある。ここから、「使用分野の断絶」もあるといえる。すなわち、3語とも、急増した抽象的意味と借用初期の具象的意味との間に、意味・使用分野における断絶が存在している。このような変化は、おそらく日本語内で生じたものではなく、原語からあらためて抽象的意味を借用しなおしたために起こった変化なのではないかと考える。本稿では、このような、既に借用されていたにもかかわらず、あらためて原語から借用しなおすことを、「再借用」を呼ぶ。

以上のように、20世紀後半の「パターン」「ポイント」「イメージ」の使用の急増には、原語からの抽象的意味の「再借用」が起こったと考えられる。そして、この原語からの抽象的な意味の「再借用」は、20世紀後半の抽象的な外来語使用の急増の一過程と捉えられる。

6. 外来語史における「再借用」の時期－1960・70年代

「再借用」に関わる現象は、外来語「モード」にも見られる。石暘暘（2020）は「モード」の受容過程を示した。その詳細は次のようにまとめられる。

(26)［広告］夏の雑貨ア・ラ・モード　高島屋　（「読売新聞」1935.5.21）

(27) スカートは白のフランネルで両脇に上衣と共布を入れたミリタリーモード、帽子は服と共布で飛行帽を模した型。

（「読売新聞」1937.8.30）

(28) デュアル・モード・システムの実験車　自動車と電車の両方の働きをするもので、小回りの必要がある町なかで自分で走り、遠距離やきめられた区間はガイドウエーに乗って自動的に運ばれる。

（「読売新聞」1970.5.13）

(29) イスラエル製のレーザー・メスは、欧米ですでに百五十台も普及してい

る実用機で、その中のシングル・モード（ビームが一点に集まる）の特徴を生かして、無血的切開の機能に優れている。

（「読売新聞」1980.5.11）

(30) クラスある6年生（約100人）が卒業モードに入るのは3学期になってから。（「毎日新聞」2005.1.31）

1930年代に、ファッション用語としての「モード」は、仏語、英語の両言語から借用された。(26)のような仏語「à la mode」による「アラモード」が見られ、(27)のような英語「military mode」による「ミリタリーモード」も見られる。しかし、1970年代以降に見られる、「幾つかから選択できる働き方の様式」という意味を表す「モード」は、英語のみが起源と思われる。(28)(29)のような、英語「dual mode」「single mode」による「デュアルモード」「シングルモード」が見られ、仏語起源の使い方は見られない。つまり、1970以降に見られる意味「専用機器にある、幾つかから選択できる働き方の様式」は、英語からあらためて借用しなおしたものではないかと思われる。

このように、「モード」の受容過程には、「パターン」「ポイント」「イメージ」と同じく、原語からあらためて借用されること、つまり、「再借用」が見られる。「モード」の受容過程には、若干前節の3語と異なるところがあるが、「再借用」の発生は同じく1960・70年代に集中している。このことから、外来語史において、「再借用」の時期が存在した可能性もあると考えられる。つまり、それらの語において偶然同時に「再借用」が起こったのではなく、1960・70年代は外来語史における「再借用」の時期であって、それらの語はこの時期において同時に、原語からの意味の「再借用」が発生したのではないかということである。

なお、この抽象的な外来語の「再借用」の時期が1960・70年代に集中するのは、社会背景と関わっていると思われる。橋本（2010）は、1960年代から1973年のオイルショックまでは、日本の高度経済成長期、国際化の時期で、これが外来語の急増に影響を与えていると指摘している。この点が、抽象的な外来語の増加にも関わっているといえるだろう。また、1960・70年代に集中するのは、英語教育の普及とも関わっている可能性もある。高梨健吉・大村喜吉（1975）では「1943　中学校は外国語が一・二年必修、三年以上選択。」と記されている（p.279）。1947年の文部省の『学習指導要領―英語編（試案）』には、英語が選択科目となったことが書かれているが、高梨・大村（1975）

は「名目的には選択制だが、事実上は必修制と言ってよい」と述べている（p.236）。すなわち、1947 年前後には英語教育が中学校に普及しているといえる。この頃に英語教育を受けた中学生は、1960・70 年代にはすでに 26 歳～ 45 歳になっており、社会人の中堅層といえる年齢になっていると思われる。これらの人は、英語教育を受けたことで、原語を理解することが可能であり、抽象的な意味をより多く使用するようになったのだろう。

7. おわりに

本稿では「パターン」という外来語を取り上げ、その増加過程を明らかにした。そして、類似する変化が見られる「ポイント」「イメージ」も同時に取り上げ、3 語の増加には、原語からの抽象的な外来語の「再借用」が起こったと考えた。また、日本の外来語史において、1960・70 年代という抽象的な外来語の再借用時期があるのではないかと考える。ただし、今回検討した範囲のみでは、外来語急増の一過程である「再借用」という現象を考えるためには必ずしも十分ではない。今後、類似する抽象概念を表す外来語をさらに検証し、外来語の歴史変遷に見られる共通点を探りたい。

注

1 「ヨミダス歴史館」は、読売新聞記事の見出し・キーワード検索用のデータベースである。「パターン」を検索語として、見出し・キーワードを検索した上で、該当記事の画像からすべての「パターン」の例文を収集した。

2 注 1 の方法によって収集したデータには偏りがないかどうかを確かめるために、『読売新聞縮刷版』からサンプリング調査も行った。サンプリングでは明治から 2017 年まで、10 年ごとに毎月の 1 日分の『読売新聞』の朝刊記事を調査する。抽出日は各月 9 日とし、9 日が休刊の場合は翌日のものを採ることにする。1880、1890、1900、1910、1920、1930、1940、1950、1960、1970、1980、1990、2000、2010、2017 の各年の 1 月から 12 月までの 9 日、合計 180 部（15 年 ×12 日）を、縮刷版の紙面データから収集した。

3 (4) は、「「グラウンド・パターン」とよばれている」という表現であるため、この「グラウンド・パターン」は地理の専門用語の可能性があるが、著者の中谷宇吉郎は物理学者であり、イギリス留学という経験もあるため、英語の用法にそのまま沿っている可能性も高い。さらに、この時期のほかの意味②の使用はすべてテレビ放送の分野に見られるため、本稿では、(4) は特殊例として扱うことにする。

4　この時期に見られる表記には、「パターン」と「パタン」の 2 種類がある。1930 年代には、「パタン」のみが用いられる。1940 年代になると、「パターン」という表記が登場し、1950 年代以降、「パターン」のみが用いられるようになる。

5　データベース調査とサンプリング調査はいずれも『読売新聞』の調査であるが、異なる方法で調べても、この時期には専門用語（意味①或は意味②）のみ見られる。また、異なる調査方法でも同様の結果になるという点は、後に示す表 2 においても同様である。なお、両調査に重なる例はない。

6　意味①「型紙」、意味②「図案」の初出は、本稿の調査範囲ではそれぞれ 1934 年、1953 であるが、さらに、国立国会図書館デジタルコレクションで検索した結果、意味①「型紙」は 1924 年、意味②「図案」は 1936 年に初出を遡ることができた。それぞれ 6 例、1 例が見られ、具体的には以下のようなものである。

＊第四篇　新型紙（結城ニューパターン）の使用法

（結城親学『可愛らしい男女子供服の縫方』p19　東洋図書　1924）

＊「色紙によるアブストラクトパターン」本圖は色紙により意味内容を持たない純然たる形式としての形と色と分量とを其のもつシュンヌングによって全然主観的、抽象的に構成した装飾圖案である。

（和田三造・矢崎好幸『最新図案教程』p177　総合美術研究所出版社　1936）

このように、意味①「型紙」の初出例は、洋服裁縫の専門書に掲載されている。他の 5 例も同様に、洋裁の実用書に見られた例である。また、意味②「図案」は 1 例のみであるが、美術の実用書の例である。つまり、国立国会図書館デジタルコレクションにおいては、意味①「型紙」、意味②「図案」の初出はより早く見られるが、本稿の調査結果と同様に、借用初期における日本語「パターン」は具象的な意味で専門分野に限って用いられることが分かる。

7　意味③「一定の決まりを持った繰り返しの型」」の初出は、本稿の調査範囲では、1970 年であるが、さらに、国立国会図書館デジタルコレクションで検索した結果、1956 年に遡ることができた。以下に挙げる例のように、経済、医学、教育などの専門書に見られる。

＊生活の内容をなす消費パターンがどう変わっているか、…、一般経済の発展や変動にも大きな影響を与え、…。

（『国民生活白書 . 昭和 31 年版』p2 経済企画庁　1956）

＊従って、この 3 者を解析することは、Ach 代謝の本来のパターンを決定する上に必要であろう。（小林隆他「代謝面より見た間脳、下垂体、性腺系 : 間脳に於けるアセチールコリン代謝」『日本産科婦人科學會雜誌』12(2)　1960）

＊宿題テーマとしては特殊学級教師の行動のパターンの形成と変化をとりあげてはどうかということの検討が座長に一任された。（大西誠一郎他「特殊学級教師の行動のパターンの形成と変化」『教育心理学研究』8　1960）

このように、意味③「一定の決まりを持った繰り返しの型」は、意味①が用いられるファッション分野に限られず、幾つかの分野に見られる。これは1970年代の新聞の先鞭と位置付けられるのものではないか、と考える。専門書においては、第Ⅱ期の開始は、10 ～ 15年ほど遡ると考えるべきかもしれない。

8　意味④の初出例は、今回の調査では1979年のものであるが、これも1980年代の用例と一連のものと考え、表4にも入れてある。

9　念のために、「(one~ten) ＋ pattern」の形で、「COHA」（1990年代）について検索を行った。検索結果は10件である。その中の5件は「one pattern」の形での用法で、「一つの方法」（2例）、「一つの図案」（3例）という意味で使われるものであり、日本語「ワンパターン」の「一つの型」と異なるものである。

＊ The point is that as long as your clothes are properly fitted and your tie is properly proportioned and knotted, you can be stylish wearing solid colors with one pattern mixed in.　（スーツの図案）

＊ That was where the drumming came from, one pattern so low he could not really hear it, only feel a dim vibration of the small bones in his ears, and another drum sounding higher, beaten intermittently, like a voice calling to someone and waiting for answer and calling again.　（音の振動の方法）

また、残りの5件はすべて (two~ten) ＋ patterns)」の形での用法である。これらは、「いくつかの図案」（3例）、「いくつかのやり方」（2例）という意味で使われるもので、普通名詞の複数用法である。

＊ For example, when you're matching a suit, shirt and tie, stick to two patterns (one stripe, one non-stripe) maximum.　（ネクタイの2種の図案）

＊ Three patterns of ineffective communication are common, all driven by habits developed in more stable times.　（交流の3種の方法）

10　「夏目漱石（1918）「道草」『漱石全集』第6巻　漱石全集刊行会」で、「影像（イメジ）」という形の表記を確認している。

調査資料

British National Corpus（BYU-BNC）https://corpus.byu.edu/bnc/

Corpus of Historical American English（COHA）https://corpus.byu.edu/coha/

Oxford English Dictionary（OED）https://www.oed.com/

Sinclair、John（2001）Collins COBUILD English dictionary for advanced learners. 3rd ed Glasgow : HaperCollins

『『青空文庫』パッケージ（20190401）』『日本語歴史コーパス (CHJ)』国立国語研究所

『新潮文庫の100冊：CD-ROM版』新潮社　『CD- 毎日新聞データ集』日外アソシ

エーツ
『ヨミダス歴史館』https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan 『読売新聞（縮刷版）』読売新聞社
『現代用語の基礎知識』（1980 年版）自由国民社

参考文献

金愛蘭（2011）「20 世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化」『阪大日本語研究』別冊 3（2）
佐竹秀雄（2002）「新聞の生活家庭面における外来語」玉村文郎編『日本語学と言語学』明治書院
石暘暘（2018）「外来語「ポイント」の受容と変化」『言語科学論集』22
石暘暘（2020、印刷中）近現代における「外来語「モード」の受容過程」『国語学研究』59
石暘暘（2020）「近現代における外来語「イメージ」の変遷」『文芸研究』187
高梨健吉・大村喜吉（1975）『日本の英語教育史』大修館書店
田中佑（2016）「外来語名詞「パターン」の助数詞への進出」『言語学論叢』9
橋本和佳（2010）『現代日本語における外来語の量的推移に関する研究』ひつじ書房
文部省（1947）『学習指導要領　英語編（試案）』教育図書株式会社

20世纪下半叶日语中外来词使用激增的过程

——以外来词“パターン”为例——

石　　旸　旸

在20世纪下半叶，日语中抽象外来词的使用量急剧增加。然而，对于具体的增加过程仍存在很多未知。本论文立足于这个研究背景，首先对外来语“パターン”的递增过程进行调查。在这个基础上，通过结合有类似变化倾向的外来词，本文将进一步探索日本语中的抽象外来词到底经历了怎么样的变化过程，最终导致20世纪下半叶使用量的大爆发呢？

“パターン”最初在日语中被使用时，只有“纸样”和“图案”这两种表示具象概念的含义。并且当时这两种含义也仅仅用于制衣和电视广播领域。然而20世纪70年代以来，“具有一定规则的，反复重复的类型”这样一种的抽象含义的使用迅速增加，并且在经济，政治等各种领域中得到普遍使用。 也就是说，随着这种抽象含义的出现，“パターン”这个外来词才真正在日本泛滥并流行起来。

此外，还存在一些与“パターン”的变化过程极其类似的外来词，比如“ポイント”和“イメージ”。“ポイント”最初在被借用到日语中时，是“分轨器”和“活字印刷的的长度单位”这样的比较具象的含义，并且也仅限于铁路和印刷这样的专业领域。但从1960年代起，“要点”这个新的抽象含义迅速增加，并在体育，外交等等各种领域被广泛使用。此外“イメージ”也是如此。在被借用到日本的初期，它是指“具体的图像”，并且仅限于文学作品领域和报纸的文化专栏中。但是从二十世纪六十年代开始，“一种典型的形象”这一抽象含义迅速增加，并且在政治，经济，生活等等各个领域被普遍使用。这些词汇中的每一个都是从早期的具象的含义一跃成为抽象含义的词汇，这些含义之间存在极大的脱节，可以认为发生了“含义的脱节”。另外，初期时使用领域极为狭隘，而后期却突然被普遍广泛使用，可以认为初期和后期的使用领域之间也存在极大的脱节，即发生了“领域的脱节”。可以认为，在这三个抽象外来词的使用变迁中，迅速增加的抽象含义和借用初期的具象含义之间，不管是含义本身还是使用领域之间都存在这极大的脱节。因为有这样的脱节存在，所以后期的抽象含义恐怕并不能在日语中逐渐孕育出来。笔者认为，之所以后期这些外来词能够获取新的抽象含义，是由于其又一次直接从原始外文中借用了抽象含义的缘故。本论文将这个过程命门为外来词的“再借用”。

综上所述，像“パターン”“ポイント”“イメージ”的这样一批外来词，虽然已经作为专业领域的具象含义已经被借用过一次，但是在二十世纪六七十年代，它们又一次作为抽象含义被借用到日语中来，进而成为真正的广泛使用的抽象外来词。这种抽象含义“再借用”的发生，就是20世纪下半叶抽象外来语急剧增加的原因之一。